伝統芸能東二口文弥人形浄瑠璃「でくのまい」継承者の減少

指導教員　　国際高等専門学校　　国際理工学科　　教授　松下臣仁
参加学生　　アラー アファフ・勝方正宗・本田詩織・柿田紗蘭・三輪恵万

1. 活動の成果要約

本取組では、担い手減少に対する直接的な問題解決を図るには継続的な対策が必要であることが再認識されたが、同時に上演時に活用される小道具の維持管理、同人形浄瑠璃特有の技術や演目シナリオの継承、魅力発信に関する課題も見出すことができた。小道具修繕の一つとして、同地域の伝統工芸である深瀬桧細工による人形用桧笠を制作した。また地域小中学生に伝統芸能を身近に感じてもらえるようミニ人形制作体験会を実施した。そして保存会の情報発信の為の Web サイト及び SNS の基盤を構築した。

2. 活動の目的

白山麓地域において 350 年以上にわたり継承され、「尾口のでくまわし」として国指定重要無形民俗文化財に指定されている東二口文弥人形浄瑠璃は、同地区における人口減少、担い手の高齢化という課題に直面している。その為、東二口文弥人形浄瑠璃保存会は、「でくのまい」の認知度向上にも積極的に取り組もうとしている。本活動では同保存会員へのインタビューや現地視察を通じて現状を把握し、国内外における「でくのまい」の PR、地域伝統芸能を活用した地域活性化等について、東二口文弥人形浄瑠璃保存会へ提案し、実践することを目的とした。

3. 活動の内容

(1) 現状理解

今年度 5 月から 7 月にかけては東二口文弥人形浄瑠璃に関する理解を深めるための情報収集を行った。毎年 2 月に行われる本公演会場である東二口歴史民俗資料館を訪問し、保存会員の方々へのインタビューを実施した（写真 1)。また定期的に行われている保存会員による練習会にも参加させていただいた。これらの活動を通じて、これまでの歴史や実際に使われる人形や舞台の特徴について学ぶことができた。また観客席側から観るだけではなく、普段は観ることができない舞台の内側から演技を間近に観ることで、演技中の細かい動きや迫力を直に感じるものとなった（写真 2)。

写真 1　資料館見学の様子

写真 2　練習会見学の様子

10 月には白山市国際交流室主催による伝統芸能による国際プロジェクト「尾口のでくまわしと徳米座 －人形浄瑠璃の世界－」が松任ふるさと館で上演された。当日は出演する同保存会に帯同させていただき、コロナ禍で長らく上演できていなかった本番の舞を間近で観劇する機会を得ることができた。

本番の演技の迫力や観客の反応を確認することができた。

調査を通じて東二口地区の住民の高齢化と人口減少による担い手不足の大きな要因の一つとして、明治期に多くの村民が北海道へ移住したことも影響していると伺った。かつては 20 名以上いた担い手も、現在では 12 名しかおらず、それぞれが太夫、三味線、人形の舞手として、時にはいくつもの役割を同時にこなさなければいけない状況である。人口減少と高齢化による継承者問題はあらためて大きな問題であると再認識した。舞手不足に対する問題については、2017 年より毎年 2 月に行われる本公演に向けて、金沢工業大学から有志の大学生 3～5 名が舞い手として参画しており、定期的に練習会に参加し技術指導を受けている。

(2)アイデア立案と提案

現状調査を踏まえ、技術と知識を継承し新たな担い手を増やしていくことは最重要課題ではあるが、同時に上演時に活用される小道具の維持管理や魅力発信に関する課題も見い出された。本活動では、これらの観点からモノや情報の継承をしていく為のアイデアを考案し、以下の 3 点について保存会に提案した（写真 3）。

a) 地域伝統工芸である桧細工を活用した人形用桧笠の制作
b) 地域の小中学生に向けて、伝統芸能を身近に感じてもらうミニ人形制作体験会の実施
c) 当保存会の活動や人形浄瑠璃の魅力を継続的に発信する Web サイト及び SNS の構築

写真 3　今後の活動を提案

4. 活動の成果

a) 桧細工を活用した人形用桧笠の制作

上演時には、兜や刀、編笠など、様々な小道具が使用されているが、その傷み具合も様々である。かつては住民が手作業で修繕していたが、今では何十年も修繕されないまま管理されている小道具も多くある。その小道具の一つである編笠の修繕に着目し、この地域の旧尾口村深瀬に伝わる伝統工芸である桧細工を活用した人形用の桧笠を制作した（写真 4）。

制作には伝統工芸士の香月久代様にご指導いただいた。香月様のお話では、これまで文弥人形浄瑠璃に使われる小道具に桧細工が使われたことはなかったようである。本制作を通じて、地域で大切に守られ伝えられてきた芸能と工芸の魅力を組み合わせることで、新たな付加価値として地域の人々の誇りや想いもつなぎ伝えるものとなりうる可能性を感じることができた。

東二口歴史民俗資料館の天井にも桧細工が施されており、地域の伝統工芸を活用したこの桧笠は保存会員の方々から大変好評を得ることができた。人形への着用具合、サイズも程よく、上演でも活用できることが確認された（写真 5）。

写真 4　桧笠制作

写真 5　桧笠を着用しての舞

b）地域の小中学生に向けて、伝統芸能を身近に感じてもらうミニ人形制作体験会の実施

白山麓地域の小中学校では、それぞれの地区の伝統文化に触れる機会が設けられている。生徒が東二口歴史民俗資料館を訪問したり、保存会員が学校を訪問し講演や演技を披露する活動が行われてきている。これらの活動に加え、より人形浄瑠璃の魅力を伝え興味を持ってもらう企画の一つとして、2022 年 1 月にミニ人形制作とレーザー加工による人形用ネームプレート制作体験会を実施した。地域の小中学校に募集の案内を配布し申込制とし、参加者は中学生 1 名であった。体験会では、東二口文弥人形浄瑠璃の歴史や特徴の紹介、人形用ネームプレートをレーザー加工するためのデータ作成と、レーザー加工、ミニ人形の制作を行った（写真 6）。

今回のミニ人形制作体験は、2 月の本公演の際にも上演開始までの待ち時間で観客が参加できるように体験内容をアレンジし実施する予定であった。しかしながら残念なことに本公演は中止が決定した。

今年度の制作体験に関しては十分な参加者を募ることができず、募集方法や体験会の有用性の評価については、継続的な検証が必要である。人形浄瑠璃とものづくりを組み合わせた活動の可能性について、今後も内容を検討していく。

写真 6　ミニ人形制作の様子

c）保存会の活動や人形浄瑠璃の魅力を発信するウェブサイト及び SNS の構築

現在、保存会は独自の情報発信チャンネルを有しておらず、主には白山市のウェブサイトや白山市公式 YouTube チャンネルを通じて情報が国内外に発信されている。その為、保存会の歴史や東二口文弥人形浄瑠璃特有な魅力、日頃行われている保存会の活動をリアルタイムに発信することが難しい状況である。この伝統芸能の魅力をより多くの人に知ってもらう機会を広げ、継続的に情報発信ができるプラットフォームとして、保存会独自のウェブサイトと SNS の基盤を構築した。今年度中の公開に向けてウェブサイトの内容について保存会と細部を最終調整していく。公開後は、保存会で運営できるように更新方法のマニュアルなどを作成し引き継ぎをしていく予定である。

5. 次年度以降の計画

2022 年 1 月、保存会への成果報告時に、会員の方々から他にも何点かの小道具の修繕の相談があっ

た（写真 7）。次年度においては、小道具などの維持管理については、可能なものは３D プリンターなども活用したデジタルファブリケーションによる管理を検討している。手作業によるモノの良さや趣を残す部分とテクノロジーにより効率化できるものを見定める必要はあるが、これまで手作業で修繕してきたモノでも、データ化して記録として残せるものは、今後の管理・制作の効率化を図ることができると考える。

また、伝統芸能に触れることができる機会として、どのように若い世代へアプローチし、関係を構築することができるか継続的に検討していく。今回ミニ人形用にレーザー加工で制作したネームプレートは､観客へのお土産としても良いものとなるのではないかという保存会員からの提案があった(写真 8)。これまでの本公演では、観客へのお土産のようなものはなかったとのことで、来年度も継続的に検討することとなった。

最後に、保存会の活動をリアルタイムで情報発信できるように Web サイトの運営をサポートしていく必要がある。公開後も保存会のニーズに合わせたサイト内容の調整、SNS との連携を確認していく。

写真 7　保存会への成果報告

写真 8　お土産用ネームプレート案

6. 活動に対する地域からの評価

東二口文弥人形浄瑠璃保存会への成果報告時に、保存会会長の道下甚一様から、以下のようなコメントをいただいた。

「このような過疎地で、若い人たちが一生懸命取り組んでくれたことに感謝します。桧笠もとても素晴らしく、会員では思いもよらないアイデアで気づかなかった。このような古いものにも興味を持って取り組んでくれたことが大変うれしく、私達ももう一踏ん張りしなければいけないと思った。」

また他の保存会員からは、今後の保存会独自の Web サイトの運用等についても非常に前向きに捉えていただいており、今後の連携に期待がされている。